上除城館址発掘調査報告書

1976

長岡市教育委員会

付図第一図

(50000：1　長岡)　　上除城址位置図…… ☒

序

この調査報告書は，上除城址館の一部が大規模開発されるにあたり，埋蔵文化財の発掘調査を実施した記録であります。

申し上げるまでもなく文化財は，その地域の歴史や文化の正しい理解に欠くことのできないものであり，その一つ一つが今日の文化をはぐくんだ先祖の足跡であります。

この城館址は，以前から文献等により知られ，土塁や水濠の一部がありし日の面影を今日に伝えているところであります。

たまたま，この城館址を含む一帯が大規模開発されるにあたり，長岡市教育委員会では，関係官庁のご指導を得ながら，関係者と協議を重ねてまいりました結果，発掘調査を実施することとし，法に定める手続きを経て，発掘調査を上除城館址調査委員会に委託したものであります。

この調査報告書は，その調査結果にもとずくものであり，出土品とともに，今後活用され，文化財の認識とご理解を深めていただければ幸であります。

最後に，今回の調査にあたり，上除城館址調査委員会及び上除館跡保存会の各位をはじめ，ご協力いただきました皆さまに対し，心から厚くお礼申し上げて序文といたします。

昭和51年 2 月 4 日

長岡市教育委員会

教育長　山　田　幸　男

例　　言

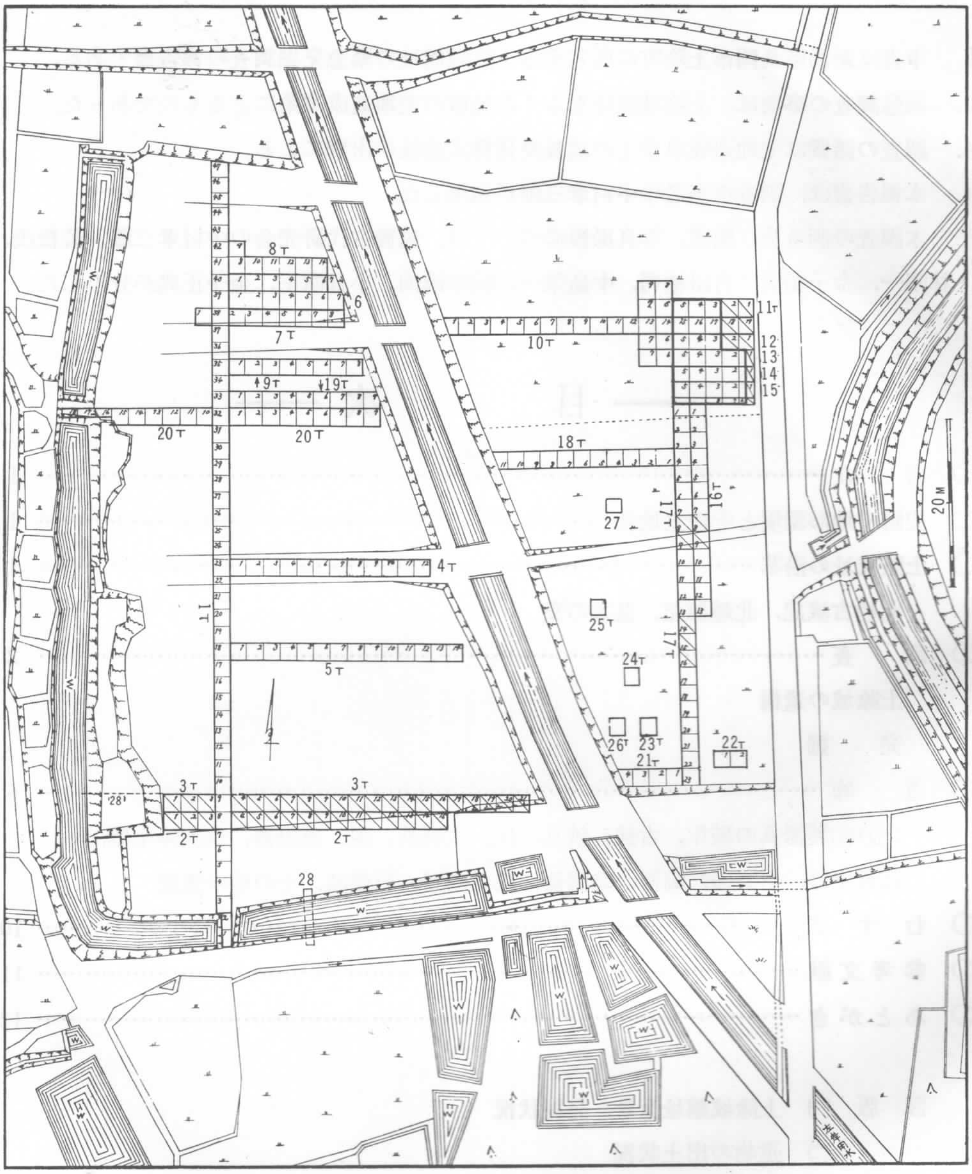
1. 本書は新潟県長岡市上除町に所在する上除城館址の緊急発掘調査の報告書である。
2. 緊急調査の事由は，上除城館址をふくむ地域の宅地造成事業によるものであった。
3. 調査の諸費は宅地造成事業主の越後交通株式会社の出費による。
4. 本報告書は，調査担当者の中村孝三郎が執筆した。
5. 本調査の測量及び製図，写真撮影については，越後古代研究会の中村孝三郎，若松茂，神林昭一，金子拓男，竹田祐司，中島栄一，駒形敏朗，小日向正，金子正典が分担した。

―― 目　　次 ――

○ 所　　在 …… 1 頁
○ 史跡の地形環境とその立地性 …… 1 頁
○ 上除城址の沿革 …… 1 頁
　北越古城記，北越雑記，温古の栞
○ 調　　査 …… 2 頁
　上除城の遺構
　発　　掘
○ 遺　　物 …… 6 頁
　(金)銅製器具の破片，古銭，鉄具，椀，木製具，硯，須恵器，珠洲系土器，
　瓦質土器，土師器，陶器，陶磁器，褐色陶器，石製品，その他の遺物
○ む す び …… 10 頁
○ 参考文献 …… 11 頁
○ あとがき …… 12 頁

図　版 (一) 上除城館址全景，発掘状況
　　(二) 遺物の出土状況
　　(三) 遺物の出土状況
　　(四) 遺物　Ⅰ
　　(五) 遺物　Ⅱ
　　(六) 遺物　Ⅲ
付　図 一　上除城址位置図
　　二　上除城址（平面図）
　　三　濠と土塁
　　四　上除城の鍛冶場址

付図第二図


8T
6
7T
10T
11T
12
13
14
15
9T
19T
20T
20T
18T
17T
16T
27
4T
1T
25T
17T
24T
5T
26T
23T
22T
21T
3T
3T
28
2T
2T
28
20M

上除城館址

上除城館址発掘調査概報

○（本史跡の名称については，その城郭の種別よりも，伝承文書や，現在の地元民に親しく呼びならわされてきた「上除城址」の名称を主用した。）

◇ 所　在

新潟県長岡市上除町北原甲1,580番地～1他

◇ 史跡の地形環境とその立地性

上除城址は，信濃川に架けられた長生橋から西方へ約5㌔，上除町の北側に立地し，八石山脈の東縁りを北にむけて走る長峰丘陵の北麓にあって，標高27mをしめしている。

城址の南～西は，標高50mの浄円寺山（現在は宅地化）を背景とし，また東及び北方は，そのむかし信濃川や，渋海川の造成した広い中越平野にのぞみ，南方の高寺集落の松林地帯を水源として北流してくる払川の流れと，沖積地に点在した大～小の沼などを自然の要害とした平城型の居館址で，その南側一帯は古くからの城下街の伝承をもつ「向町」の集落がいまも形成されている。

足利氏の日本統一がなった室町幕府（1339年）時代には，伊豆，上野及び越後の国を領有した守護職の上杉憲顕の一族が，関東から越後に入国してきて，貞治年間（約600年前）以降の拠点としたところは，宮内町の南方にある古志の上条城であった。そしてその後土着の地元国侍の勢力を抑制の必要からか，国内の統制強化を計り築城されたのが，第三次外郭線上の刈羽黒滝城（鵜川上条城）であり，またその本拠古志上条城とは信濃川をへだてた西岸にある神谷，大島，白鳥，吉川の荘などの，川西郷の第二次外郭をかためるために築営されたものが，上除城の存立とみなされるものであろう。またこの上除城址の北方800mの地点には，昭和28年春の土地改良工事で，土師器，須恵器，墨書土器を出した平安時代とみられる関原町の「下屋敷」の大形集落址が，一帯の水田中に潜在していて，上除城とそれらのつながりが，つよい注目を残している地点である。

◇ 上除城の沿革

上除城館址に関する城郭の盛時中，即ち上杉時代に属する古文書，古文献は現在では全くみることができない。しかし上除城主の上杉憲永が英明の人であったロ伝承がわずかに語り伝えられているし，また憲永の筆蹟が仏道に入った小千谷五智院にかって所蔵されていたというが，現在は不詳である，そしてわずかな文献が「北越古城記」「北越雑記」「温古の栞」「三島郡誌」などに，その片影が書記されているが，その主点はかっての郷土史家の手による「孫引き」的な要素によって成立している。次にそれらを引記する。

北越古城記

三島郡上除村　　城主　上条重太夫

此仁，長岡上条殿従弟にて，文明の頃（約500年前）上条の城より此城に来る。代々越後武士にて然れ共，家督に相続すべき嫡子無之，落髪して小千谷五智院住職し，後に紀伊国高野山で死去す。

北越雑記

上除村に在。

城主は上条民部太夫（越後守護職）の弟重太夫。始めの城主は上条殿の従弟にてその名不詳。文明年中上除の城主となり，数世相続す。重太夫嗣子なく剃髪して魚沼郡小千谷五智院に住職し，後高野山にて終焉。

温古の栞　第一巻，第四集，明治23年4月15日

除城址

三島郡白鳥荘上除の古城跡は，村西上の山北麓にして広田を要害に構ふ。除の城と云ふ。本丸凡三十間四方，外郭之に適す，馬場，的場濠塘の跡幽かに残る。上杉の一族上条重太夫憲永，文明年中，古志郡上条の本城より分地して此処へ移住せしに，世の無常を観じ剃髪して魚沼郡小千谷真言宗五智院の住職となり，後紀伊国高野山に登り入定せしと云ふ。嗣子無きがゆへ家名断絶す。当村の八幡宮は氏の崇敬ありし社にて，若干の寄附せられたり。又上の山南麓にころび山と称する勝地は，氏が常に此処に遊び風雅を友せられけり由，すべてこの辺には古塚多く散在す。是は城郭破却の折り，家什の品を埋めしものと云伝ふ，五智院に氏の筆跡と称せるあり，頗ぶる名筆とす。

（この他『三島郡誌』所載の「上除城址」は，以上の「温古の栞」よりの転載記事故に之を略す。）

⊠ 調査

○期間　昭和50年4月19日～8月26日

○調査体制　上除城館址調査委員会

調査担任者　中村孝三郎（日本考古学協会員）

調査員　竹田祐司，神林昭一，若松茂，金子拓男，駒形敏朗，中島栄一，松井寛，小日向正，金子正典，小山増栄，稲岡嘉彰

参加者　上除町町内会有志，上除城址保存会（会長太刀川茂雄，副会長片桐幹夫，中村四一郎）越後古代研究会，三条商業高校考古班（参加者芳名後記）

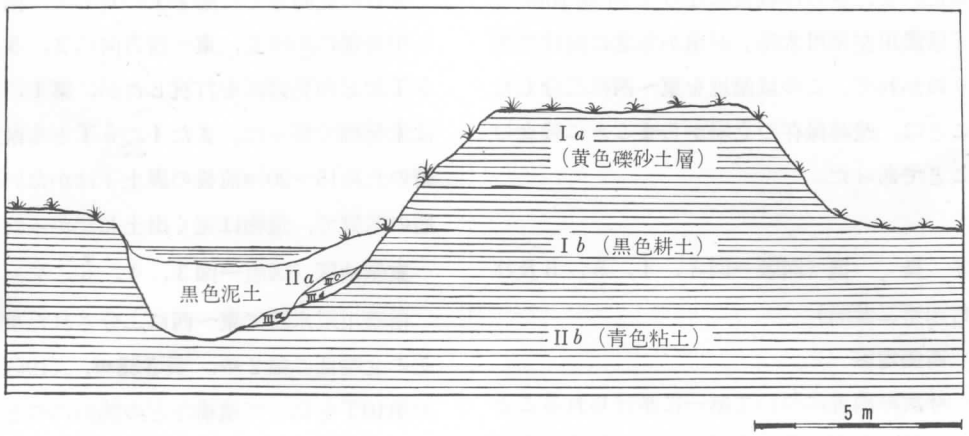
事務局　長岡市教育委員会社会教育課

◉ 上除城址の遺構（図版～第一図，付図第二，同第三図参照）

このたびの調査で確認されたものは，まず東～西，南～北ともに100m前後の方形を呈した城館址にめぐらされた（石垣をもたぬ）濠と土塁跡の存在であった。しかし東及び北側の帯状のくぼみをなしている外郭の水田は，現在水を保ってはいないが明らかにかっての濠跡とみなされるものであった。

現存する濠は，付図二，三図の測量図にみられるように，その埋没性から幅5m前後が現在形づくられているが，城郭の盛時には，濠の揚土によって構成される土塁の容積量から，ところによってはより幅広い10m前後の幅員をもった濠の処在が推定されるのであった。また西側には点々と決壊部分がみられるが，長さ50mの土塁が唯一のものとして残されている。そして幅の最も広い基底の土居敷の部分は11mに達し，高さも3mに及び，また土塁の上表面の幅も6mを数えている。それらのことから当時は幅広い土塁の上面にはさらに木柵などの構造がなされたことも推定される点であろう。また土塁の堆積層土は当

付図第三図



水　濠　と　土　塁（第28地点）

然のことながら，付図第三図のような層序をしめしていて，一見して濠の揚げ土によって構築されていることが知られるのである。土塁の現存する傾斜角度は約40度をしめしていて，その築構が「**叩き土塁**」というよりも，「**柴土居**」づくりの技法によることが考えられるのであろう。また濠の構造は，土塁の造成についてつよい関連持続がみられるのであるが，その幅は10*m*前後で，第28地点では断面の深さ3.1*m*であった。しかし現在の湛水面からかっての濠底までは2.3*m*をしめしていた。またさらにこの城郭が浄円寺山の麓下にあって，濠水の保有は払川からの通水ではなく，現在もそうであるようにつよい自然の地下湧水によって，一定の水量が保たれていたとみなされるのである。

この城の濠と土塁で劃された全形が，方形に縄張されていたことは，大正四年，この城の北側に敷設された長岡鉄道の工事で，東や北側の土塁や土が運びだされたときの同村の目撃者である片桐道氏や，片桐市次氏などの古老の話からも知られるのであり，またこの城郭の東を流れていた払川の旧流跡附近には，的場，馬場，竜門，道場場などの地名が今も残されていて，二の丸の所在が推知される。また城の内郭の東側の今の町道部分にはかなり幅広い土塁があって，その東～南隅角に桜の大樹があったことや，その土塁は東～南の角から北に向けて約40*m*ほどの地点で切断されていたことが物語られるのであるが，おそらくこの土塁の切れ目が，上除城址の東向きした大手の門跡のあった地点と推定される。また付図第二にみられるように，南あるいは西側に現存する濠の面には，南側に一箇所，西側にも一箇所，計二地点に「渡りの細い歩道」がつくられているが，ボーリングの検索によってこの歩道が，後世につくられた農歩道であることが判明した。おそらく当時は木橋などによって外部との連絡がはかられていたのであろう。

この城館址は，さきにも記したように，約100*m*四方の区劃の中にその主点が築営されていた。そして地面はきわめて平坦にならされていたが，しかしそれは鉄道工事の際の採土場となり削土が行われたり，またつづく開拓水田が計画されたりしての結果であって，城郭内の層土は搬出の変動や破壊による動土の激しさは発掘によってよく知られたのであ

った。またさらに戦後になって河幅10mの「信濃川左岸用水路」が南から北に向けて掘りぬかれて，この城館址を東～西に二分したことは，遺跡保存の立場からまことに残念のことであった。

◉ 発　掘（図版一図3，4，5，6及び付図第二参照）

西側地区

今次の調査について第一に挙げられることは，城址を南～北に分断している信濃川左岸用水路の流水面が，城郭全域の地表面に比較して最高時には約80cm前後の高い地点を流れていて，その浸水にもとづく湧水のためにポンプ排水の作業がつづけられたが，このために発掘班ははじめから終りまで苦しみぬいたのであった。（図版一図～5）

発掘溝の設定は，付図第二にみられるように南～北した幅2m，長さ94m，47区劃した第1トレンチ（以下トレンチはTの略号を用いる）を設けて発掘作業をすすめたが，この付近は過去の削土によって20cmという黒褐色表土の下は，すぐに拳大の堅い砂利層が露程され，遺物は飛散性の稀薄な須恵器の破片がわずかに収納されただけであった。しかし北側の38区から40区にわたって須恵器や陶器類の破片などが40～50cmの深さから発見されてきたので，この地点の東側に密接させて第7，8，9，19，20などの各Tを設けて遺物や遺構の追求につとめたが，つよい地下水の滲出に苦しい作業がすすめられ，深さ50cm前後に原層の一部が発見されて中から木炭片やフイゴの口の破片や，厚手大形の須恵器の破片にまじって中国系とみなされる陶磁器の細片などが検出されたが，この地点は若干掘下げられた鍛冶場のようにみられた。

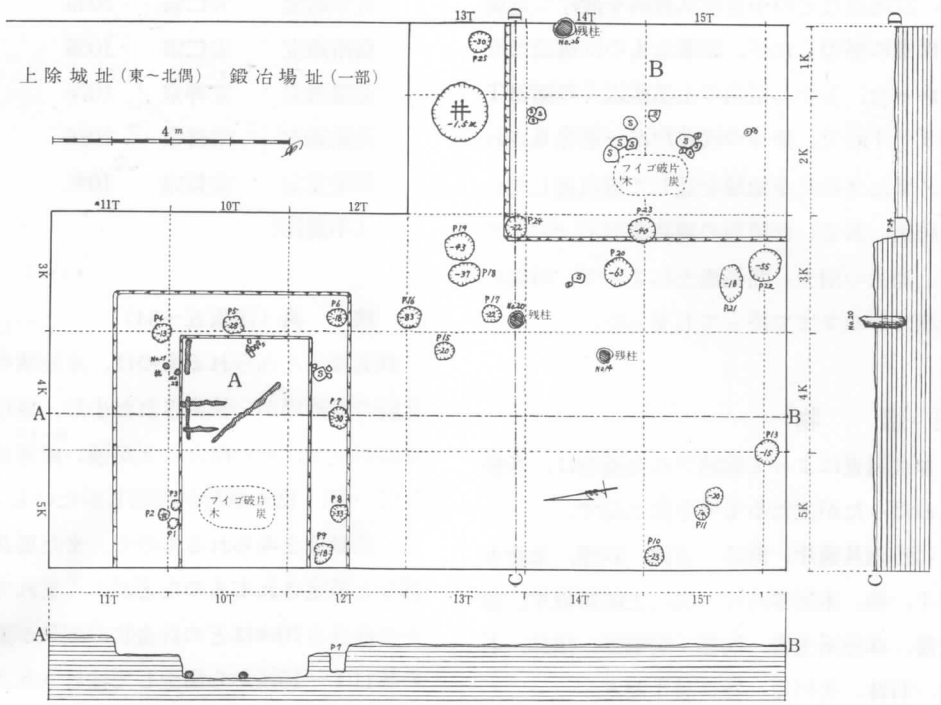
さらに北向きした第1Tに対して，南側から中央部にかけて，東～西方向に2，3，4，5Tなどの発掘区を打杭したが，第1，2Tは未発掘で終った。また4，5Tとも削土地帯のため15～20cm前後の表土下はかたい砂利層の基盤で，遺物は完く出土しなかった。

東側地区（図版一図3，4，6，7）

信濃川用水路で東～西に二分された東側は，その北端部に幅2m，長さ38m，（19区劃）の第10Tを切って遺構などの摘出につとめた。そして東側の13区付近から17区にわたって，深さ1m前後の数地点で断続した平面性の敷石遺構が（図版三～20，23）発見された。またそれらに付随して多くの大形須恵器の破片や，陶磁器などの細破片が点々と検出されはじめた。このような遺物の包含層の摘出から第10Tに接着して11，12Tの拡張を行い，さらに第13，14，15Tの密接設置をして，遺構などの追求につとめた。（付図第四図参照）そしてこの地域からA，B二群の焼土や灰層の地帯が露出されて，木炭，フイゴ破片，鉄滓、鉄具，朱塗木器片，薄い青銅器具の破片（図版六～40，45）古銭，表面を欠失した硯，木器破片，木製の椀（図版二～14）陶器類や石鉢，石臼などが，1m40cmの深さまで重層しておびただしく検出されていった。

このようにして深さ1m以上に掘り下げられた東～北隅の一角は，その広さも11×12mに拡大されて，北側のA，東側のBの二地点はさらに広さ4～5m，深さ約40cmの方形状につくられた当時の掘り下げ地点がしだいに姿をあらわしてきたが，ともに木炭細片や，厚さ約30cm前後の灰層，あるいは多くのフイゴの破片，鉄滓，小さな鉄具，（図版五～34，37，38）などが点々と検出されて，この地点がかっての鍛冶場の遺構であることが確認さ

付図第四図



れた。また13Tの２区に直径１m，井戸枠をもたぬ素掘りの円形浅井戸が発見されたが，その深さは1.5mで，底部からは何も検出されなかった。（図版二～15）

A，B地点をふくむこの地域は，付図第四図にみられるように，点々と大～小26の柱穴と残柱の基部が３箇所（図版二～11）に確認されたが，それは配列性をもったり，あるいは散在的であったが，この地点の上屋建造物が丸太直立の掘立性の家屋構造のものであったことが推定された。またA地点の二段に掘下げられた中央部（10T～4区）には，幅70cmの丸太枠組の長方形井桁の貯水槽とみられる残構址が発見された。（図版一～４，　付図四図～A地点）

その他B地点からは藁（わら）の堆積が摘出されたり（図版二～10），また鍛冶場（かじば）で使用した金盤（かなばん）用途の叩台とみられる直径20～30cm前後の，石塊が５点収納されているが，その一面には強い敲打（こうだ）痕跡を残している。（図版三～19）そしてこれらの叩台的な石塊は，その下～側面が，個定のためか数個の大～小の礫で固められていた。しかしこの石塊は，長い一端が加工されているものがあり，建造物の礎石とはみられないものであった。

以上の東側地域では，主点をなした東北隅の発掘溝の他，南～北にむけて長さ46m（23区劃）の第17Tを設け，またそれに付着して長さ21mの第16Tを切り，さらに第17TとT字状に長さ21mの第18Tを設置して遺構などの発見に配慮したが，飛散性の須恵あるいは珠洲（すず）系などの土器の小破片が散発的に出土しただけであった。このあたりは城館址の大手門付近とみられる地域で，かなり踏みしめられたような固い地積の部分もあって，広場や，通路地帯のように考えられた。そして以上の発掘トレンチの外に，左岸用水路の内面域に，最後の日程を計りながら，第22，23，24，25，

26，27地点などの小さな試掘溝を設けて遺構の探査に努力したが，顕著なものは確認できなかった。しかし南角の土塁敷近くの第21Tの３～４区で，無枠の浅井戸が一基発見された。またさらに全地域を通して重点視していた居館，あるいは屋形の建造物跡については，過去の削土，開拓搬土によって，明確に把握できぬままで終ってしまった。

◇ 遺　物

本次調査によって収納された遺物は，多種にわたったが主たるものを次に記す。

(金)銅具破片，鉄具，古銭，鉄滓，朱塗木器片，椀，木製器具片，硯，土師器破片，須恵器，珠洲系土器，陶器，陶磁器，擂鉢，石臼，石鉢，火打石，鞴口破片など。

△ (金)銅製器具の破片（図版六～40）

図版六～左上の金銅製とみられる小さな器具の破片はうすく鍍金の痕を残し，発掘されたときは一方が彎曲した袋状を呈していたが，薄い金属のためその後，図のように四つに割れてしまった。厚さ１～２㎜。青錆が付着している。刀の柄頭か，あるいはコジリの金具と推定されるものである。

△ 古　銭（図版二～８）

古銭は鍛冶場の第12T～６区，深さ１m10cmの地点から，縄差し状の棒型の姿で８枚が付着したままと，また開元通宝の一枚が約５cm離れて検出された。古銭は下記の孔銭の中国貨幣であった。

古銭名	(中国) 銭造年代	A.D	出土 枚数
開元通宝	唐高祖	621	1
祥符元宝	宋真宗	1008	1
皇宋通宝	宋仁宗	1039	1
嘉祐通宝	宋仁宗	1056	1
元宝通宝	宋神宗	1078	1
元祐通宝	宋哲宗	1086	1
紹聖元宝	宋哲宗	1098	2
(不読銘)			1

△ 鉄　具（図版五～34）

鉄製器具とみられるものは，東地域の東～北隅の鍛冶場から検出された小形，短片性のものが主で，そのほとんどが強い赤錆が包着していて，直に原形が判別しがたいものが多く，鉄鏃系とみられるものや，また馬具の一部分と推定されるものなどがふくまれている。その他長さ70cmほどの針金状の細鉄が鍛冶場の第11T～15区から出土して注目された。

△ 鉄　滓（図版五～37）

鉄滓は大～小数十点の出土をみ，その形体は礫塊状を呈し，赤錆が付着しているが異状の重さをもち，なかには直径が10cmをこえるものがある。

△ 朱塗木器の破片（図版六～45）

鍛冶場の中心部第12T～５区から発見された朱塗りの木器片は，長さ７cm，厚さ４～５㎜のうすいへりの部分とみられるものが５点検出されている。そして三面に朱漆が施され，その一辺は母体につながる破砕部分を構造している。器種不明。

△ 椀（図版二～14）

木製の椀は図版の如く，裏面を上にして第12T～６区，深さ１m10cmの地点から摘出された。しかし底部の突起は残されているが，腐蝕が甚だしくすでに外形の多くを失い芯木部

分が主体をなしていた。しかし内部の小部分に黒漆の塗布痕跡が認められる。また残部の直径は10cm前後である。

△ **木製具**（図版三～21，22）

一個体の完形をしめす木製の用具は検出されなかったが，板状の器具の一部分や，（図版三～21），角棒などの残欠や，叩棒（図版三～22）とみられる農具状のものなどが十数点収納されている（木質は未調査）。

△ **硯**（図版四～31）

硯は第10T～15区からの出土で，長さ13.7cm，幅8.6cm，厚さ1.7cmの長方形型で，灰黒色スレート状の粘板岩から作出されている。その上面は剝落し，左隅も小さく欠失しているが，裏面は平坦な原面を残している。また上面の右先端ちかい中央に，三日月状の彎曲した彫り研がれた水池の底部が細く鋭く残されている。

新潟県においては，まだ須恵器とそれにつながるものの編年分類は，資料もすくなく不充分のものであって，近年福井，石川県などの北陸地方の須恵窯址とその製品と，それにつづく珠洲系土器の研究調査がすすみ，かなりの細分が検討されてきた。しかしそれらの生産品の波及性や，越後の窯址とその製品についての基本的な研究はまだ確立されていない。そうした点から本調査の出土物の細分決定も後日にゆだねるものが多いのである。

△ **須恵器**（図版四～24，25，27）

図版四～24の２点の須恵器の破片は厚さ８mm～１cmで，表面は格子目，裏面は青海波文の両面叩模様が施されている。平安末期のものと推定されるが，この種の須恵器はきわめて微量の出土であった。

図版四～25と，同27の上の大形破片は，口唇部の直上した常滑系（北陸越前窯系）の製品とみなされるもので，27の上は第７T～２区から検出され，口径50cm，厚さ1.4cm，肩の張り気味の大甕の破片で，広い部分にわたって黄緑の自然釉がかかっている。

25は厚さ1.4cm，赤渋色と黄緑の厚い自然釉のかかった大甕の破片で，かなり多くの一括破片として収納されたが，復元物ができなかった。胎土は細密の灰色をしていて，焼成は良い。また図版四～28は薄い堅緻の破片で，口縁下に波状文が施されていて，室町期の製品とみなされるものである。

△ **珠洲系土器**（図版二～９，図版四～29，同～30）

須恵系土器が酸化焔にちかい中性焔で焼かれているのに対して，珠洲系の土器は還元焔で焼上げられ，黝灰色を呈すといわれるが，その製品は生活雑器が多い。城館址から出土した珠洲系の土器は，図版二～９，図版四～29，同～30などがこれに属しているとみなされる。

図版二～９の土器は，東～北隅の鍛冶場から，大～小約250点ほどの破片が散在して検出され，数個体の大形の甕に分類された。しかし懸命の努力を尽してみたがついに全形をしめす復元物はできえなかった。この一群の土器は口唇が玉縁をなした直上形で，濡れたような青味をおびた灰黒色をしていて，胴の破片は厚さ1.6cm前後で，底部はきわめて厚くつくられているものが多い。また表面には横に密接したスダレ状の叩模様が施されているが，内面は連続性の指頭圧痕や，擦痕手法

によって整形作出されている。

図版四～29及び同～30は，ともに擂鉢の破片で，両者ともにやや外反りの口縁の内側にそって，櫛目状の波状文がつけられている。29は，直径40cm前後の擂鉢片で，かなり硬質の焼成で仕上り，内面に加工されたすり目の条痕は細密で鋭角をなしていて，一部分にうすい黒褐色の自然釉がみられる。また30は焼成がゆるく軟質で，すり目は浅く丸味をおびている。ともに珠洲系第三期の生産物とみられる。

△ **瓦質土器**（図版二～13）

この容器も12T～6区，深さ1m10cmの鍛冶場の床面ちかくから検出された火舎（手あぶり）あるいは「線香立て」といわれるものであるが，口縁部を完く失った約½ほどの残欠物で，胎土は低温度生産の赤褐色を呈していて全面に黒色の漆質と推定される塗料が施されている。残欠した胴部の高さは6cm，横幅は11cm，そして左側から中央の大部分には直径1.7cm方形の稲妻文が，横三段，縦8行に23箇が密着して浅い沈線で彫刻された原体を押捺している。またその右側の幅2cmのせまい部分には，直径1.5cmの円形の中に右三巴文が4点密捺されていて，さらに底部ちかくに高さ5mm，幅6mmの，断面が三角形をした細い突帯がめぐらされ，底部は平滑につくられている。そして底部角の中央部分には幅2.5cm，高さ3cmの外側にむけてふんばりをみせる角形の脚が一箇付着しているが，（3箇所付着型）またその脚の両脇には銀杏の葉形に装飾された小さな添いがつけられて，全脚部が斗栱や獣脚を思わせる頑強なつくりで，瀬戸系あるいは備前焼ともいわれるものであるが，その製産系流に注目されるものがある。

△ **土師質土器**

城址の各地点から稀薄にちらばって検出された土師器の小さな破片は，150点ほどに達したが，厚さ4～5mmの小形薄手の杯の破片で，燈明皿に用いたものもあり，上除城時代（室町期）の製品とみられるものである。

△ **陶器，陶磁器**（図版二，三，五，六）

出土した陶器及び陶磁器については，その全部が細破片で，完形，あるいは復元可能のものは収納されずその点数も300点前後の少量のものであったが，日本陶器と中国系の青磁，白磁，褐色陶器などがふくまれていた。次に主要遺物について略記する。

○ **古瀬戸**（図版五～36，同六～43，48）

36と48は，ともにうすい黄緑の釉が塗布されている破片であるが，うすい白色部分との斑がある。胎土は微細な灰白色で，内面は無釉で起伏があり，指頭での擦痕がみられる。厚さ1.1cm。

43は黒釉の瀬戸天目で室町後期のものとみられ，口唇の直上した小形の耳付茶壺の破片で，肩に窯壁の剝落粉土の付着がみられる。

○ **中国青磁，白磁，染付**（図版二～12，同三～17，18，図版六～41，42，44，46，47）

図版二～12は，厚さ5mm前後の緑色をおびた青磁の碗の破片で，外面は縁りにそって細い沈線がめぐらされ，その下部は1.5cm間隔の連弁系手法の浅い垂直彫線が施されている。胎土は灰色，中国の元時代末期から明初葉期の民窯製品とみなされる。

図三～17と，図版六～42は同一物で，翠青色の光沢のにぶい青磁器で，外面は小さな起伏をもち，高さも10cmの糸底づくりの碗形を

呈し，底部の糸底内に赤褐色の無釉の輪痕を残していて，胎土は灰色をおびている。中国浙江省の民窯，竜泉窯の製品とみられる。

44は，青磁の底部破片で，中央に花型を押捺し，糸底の内面は無釉で灰黒色をおびている。15～16世紀の明時代の中国民窯の製産品と目される。図版三～18の検出遺物も同列の青磁の破片である。

図版六～46も44と同時代，同種の青磁容器の底部破片で，糸底の内側は厚さ1.8cmで，細かいヒビ入りの焼成である。これらの陶磁器はかなり大形の容器と推定され，底部の内側中央は直径2cmの花と葉茎を押痕装飾している。

図版六～47は，長さ8.7cm，厚さ1.6cmで，本遺跡の出土物としては最も厚肉の大形器物の青磁破片である。深い青緑色を呈し，厚肉の釉が内外ともに施されて美しい肌が焼成されている。陶土は微細堅緻に焼き上げられ，白味をおびたうすい灰色を呈している。元末期から明時代初期の竜泉窯の製品とみられる。

微細な小破片のため，本書に写真の掲載はしなかったが，この他やや黄緑を呈した青磁の破片で，内面中央に蛇の目状の痕跡がみられる細かいヒビ入りの小形碗の破片が3点ほどある。これは宋時代末期，あるいは元時代初期とみなされるもので，この城址の遺物としては最も古い陶磁器に属すものである。

染付陶磁器は，（図版五～33）きわめて少量の出土で終り，遺物も図版にみられるような短小の細破片だけであった。また明時代のものと推定される白磁の小片が微量把握されている。

△ **褐色陶器**（図版五～32）

この陶器は，口径が8.4cm，高さ3.5cmの口唇に膨隆がみられる玉縁直上形の小形の茶壺とみられるもので，張りをみせる肩には四つの耳がつけられ，胴の破片の厚さは5mm前後であり，割目はきわめて鋭角の異状硬質の焼成でつくられている。また口辺から肩にかけては微光沢の小豆色肌に自然釉がうすくかかり，胴とその下底は無光沢の黒灰色であるが，小局部に緑色をふくむ自然釉がかるく滲みでている。また内面は無光沢鉛色のロクロ仕上げである。年代及びその窯の系流も不詳。

△ **石製品**（図版五～35，同～39）

図版五～35は，瑪瑙質の硬い礫石を中断半割したもので，その割れ口の周辺には細かい打撃痕跡が残されている。おそらく鉄片（火打鎌）などとの衝激による発火用具の火打石とみられるもので，長さ8cmほどの同質物が4点検出されている。

石臼 図版五～39は石臼の上体残欠で，直径29cm，厚さ10cm，周縁のへりふちは5cmの厚肉づくりで，裏面の中央には3cm前後の回転の中心孔が加工されている。またスリ目は1.6cmから2.5cm間隔のきわめて粗らい刻線で時計廻りに構成されている。石質は安山岩であるが過去に火熱をうけて赤色をおびている。またこの他直径30cmの大形の半残欠や，他に数個体の石臼の小破片が収納されている。

石鉢 中がU字状に彫りこまれた直径32.5cm，高さ16cmの厚肉の石鉢が出土しているが，水車系のものはみられない。石材は安山岩。石製品としてはその他に長さ26cm，幅6.5cm，厚さ2～3cmの円形に彎曲した茶臼の下部縁端の薄い破片が検出されているが，これも火熱をうけている。

△ **その他の遺物**

以上の各種遺物の他に，破壊された大～小数十点の鞴口(ふいごぐち)の破片（図版五～38）が出土している。

◇ むすび

今次の調査はさきにも記したようにはじめから終りまで，地中からの湧水と堅い地盤に苦しめられたが，参加諸氏の長期にわたる御協力によって，以上略記した予期以上の資料を把握することができ，またそれらの遺物をとおして当時の地方権力者の生活片鱗(へんりん)が知らされたのである。

長岡市には現在42箇所に及ぶ城館址が数えられるが，この地方では平安期の城館址とみられるものは不明で，最も古いと推定されるものの一つに，関原丘陵の南の山上にある高寺城址があり，城(じょう)一族の流れといわれる大熊備前守代々の居城といわれ，鎌倉時代のものとみなされる。これに次ぐものは村松町の東方400mの高所，要害山に築かれた村松城址や，芹川町の大島の荘，〝盾〟の城や，福田町の西背高地にある陣城の長峰城址などは，南，北朝時代の築営と推定され，それらにつづいて登場するのが，古志の上条城で，この城はさきにも記したように室町初期足利氏から〝越後守護職〟に任ぜられた上杉憲顕(のりあき)の一族が入部してきて以来，代々百年前後にわたる越後統治の居城としたもので，その築城は貞治～応安（1365年）年間とも伝えられ，宮内町南方の中越平野の中央部に所在。当時は点々とひろがる沼沢地を天然の要害とした平城であった。そして城の東側の丘陵の突端に町田城址がある。この城は三方が急崖をなしていて，上部には三段の細い曲輪(くるわ)がめぐらされ，舌状部の東尾根の接点は空濠によって切断された小さな山城で，いまも原形をよく残している。この城は平城づくりの上条城の天主台的な役目を果したものとみられる。そして町田城をふくむ上条城は上杉氏が越後に入ってはじめての拠点で，（春日山城以前のもの）おそらく関東よりの移入技術による越後における初期の築城地点と考えられる注目の城址である。そしてそれらの城郭に次ぐものが今次調査の上除城であり，室町前半期の一大居城であった上条の本城が消滅している現在では，上除城址は中越における一模式的な多くの要素をふくみ，またそれは牧野藩の長岡城の成立より約150年前の築造物であって，この二つの城の築営された歳月の距離150年間の空隙(くうげき)に，鉄砲の急激に発達する室町後～末期，安土時代にかけての戦乱期，即ち上杉，長尾時代に築かれた市内に点在する数十の山城や，居館の最盛造営期が挟在するのである。以上を要約すれば，X資料の平安時代を除いての，**第一期＝山城時代**（高寺城，村松城）。つづいて信濃川沖積地の安定する**第二期＝平城時代**（上条城，上除城，蔵王城）。そして**第三期＝山城時代**（桝形城，三島谷城，妙見の会水(あいみず)城，栖吉城）は，室町末期の戦国時代となり，それから次の徳川時代の**第四期＝平城時代**（長岡城）をむかえてこの地方の城郭時代もやがて終りをつげる。

このような経路をたどる長岡市の城郭も，以上のようなその立地性及び形～様式の変遷(へんせん)～推移がみられるのであるが，それは権力争奪の動乱の激しさと，武器の進歩と，つよい経済の変動性がそれらを成立させた主因であるとともに，またこれを崩壊させていったさけがたい当然の理のうちにあったものであろう。

中核の本丸面積が3,700㎡ほどの小規模の城館址の上除城も，刈羽（柏崎市）黒滝の上条城とともに室町中期の越後上杉の分支地点

として考えるときは，その守領地の範囲や，またその実収高などについては全く記録にも，伝承にも欠けていて知るによしもない。ここでは真疑はともかくもその輪郭を伝えるものとして，さきにしめした伝承文献を中心に考えるときは，上除城主の上条重太夫憲永の生存期は，賢明の英主といわれた鎌倉山之内系八代の棟領上杉房定の越後統治のころと推定される。しかしそれが事実とすれば，北越古城記や，北越雑記の「上条民部太夫の弟」，あるいは「上条殿従弟」とあるは，房定との関係と理解されるものであろう。憲永という人の存在を上杉系譜に求める努力もしたが不勉強のためか現在までは不詳で，鷺の巣の定正院の例もあり，古文伝承の不正整か，またかれらの度々の改名などによる別称をもって潜在しているのかも知れない。また憲永の職名とみられる「重太夫」についても，上杉の頭領の多くが「民部大輔」「民部小輔」や，「兵部大輔」を呼称していることなどから考察すれば，それが官制職名の「治部大輔」とすべきところを，訛ったり，孫引きのとき「重太夫」の当字をもってした疑もあって，後日さらに検討をつくしたいと思う。また上除城は求法入仏道の憲永一代で終ったのか，あるいはより下降したその持続性については，その出土遺物などから室町後期のある時代まで，つづいたように推定されるものがある。

終筆ではあるが，このたびの上除城址の調査遂行に関して，土地提供及び調査資金の負担などについて，深い関連にあった越後交通株式会社（不動産部）の数々の御厚意について，謹んで謝意を表します。また長期にわたって雨の日，干天の日に，最後まで流汗辛労作業の発掘調査に参加協力された各種団体などの，多くのみなさんの御努力について心から感謝します。またさらに出土遺物の鑑定分類について，御多忙中しかも長時間にわたって御教導を頂いた東京国立博物館，藤田国雄学芸部長さんならびに長谷部楽爾東洋課長さんに，深甚なる謝意を捧げて，拙い報告書をここに終りたいと思います。

（昭51.1.14　中村孝三郎記）

参考文献

○　草戸千軒町遺跡1965年度調査概報　福山市教育委員会刊

○　下岡田遺跡発掘調査概報　広島府中町教育委員会刊

○　草戸千軒町遺跡1968年度発掘調査概報　広島県教育委員会刊

○　草戸千軒町遺跡1969年度発掘調査概報　広島県教育委員会刊

○　五十嵐小文治館発掘調査報告書　下田村教育委員会刊

○　長池山砦発掘調査報告書　上越市教育委員会刊

○　日本出土の中国陶磁　東京国立博物館刊

あ と が き

楽しくもあり，苦しくもあった発掘調査をふりかえり，ようやく一つの区切りに到達した喜びで感慨無量であります。

思えば，桜花爛漫の４月，発掘調査に着手以来４ヵ月間，雨にも負けず，酷暑での厳しさに耐え，全員汗と泥にまみれながら調査にとりくんでまいりました。

ここに，調査の完了をご報告し，調査報告ができたことを喜び，ご協力いただきました皆様に改めて厚くお礼申し上げます。

更に，長岡市文化財調査審議会の委員をはじめ，多くの皆様よりはげましの言葉をいただき，一同，非常に心強く感じた次第であります。

ここに，調査の成果をたたえ，この小冊子が活用されることをお願いし，むすびといたします。

長岡市教育委員会

（参 加 者）

徳茂徳一，早川一雄，田所藤三郎，片桐三郎，田中正男，木村佐吉，片桐その，田中岬，片桐洪，佐藤善司，亀倉勇，山口一男，荒川昌和，江口信一，中村馨，長原四郎，田中慶太郎，中村一男，小片荘平，渡部秀二，片桐春男，新井たい子，棚橋雄一，小林正三，石塚寅雄，丸山政俊，片桐次郎，片桐多三郎，吉川アサ子，桜井義信，五十嵐喜一，小片秀司，前川晴彦，池田昭一，早川洋，池津誠二，山越芳樹，高野幸雄，細野浩吉，鳥山宏，山田栄作，稲川孝男，宇之津昌則，和田芳久，猪貝克浩，島津克吉，谷内田良弘，今井邦夫，船越義房，西牧伸一，曽田耕一，見辺清，駒倉文雄，山崎俊夫，岸本守一，鈴木正信，外内洋一，諸橋武，五十嵐修一，宮島秀幸，佐藤秀隆，大平康則，杉山幸一，松井正一，南雲一寿，南雲晴男，深井義春，丸山平三郎，前川教子

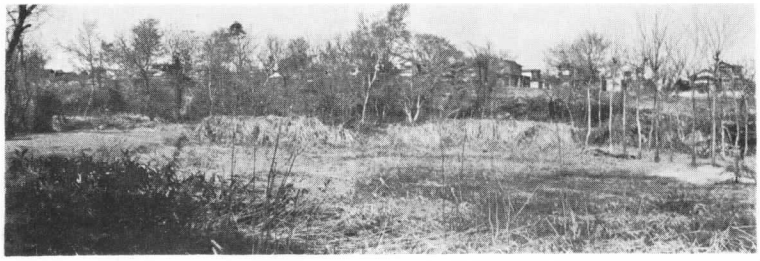
高 校 生

太刀川栄一，野村直栄，小熊昭夫，秋田仁，荒川敏幸，高野英則，小川清文，中野豊，佐藤義明，神林祐介，田中八重子，長部敏栄，徳長正一，中川一雄，長谷川春美，島宗由美子，丸山寿子，星野正弘，中村充，土田敏，関隆，丸山博，棚橋敏一，太刀川雅文，平沢浩，丸山信行，吉田道男，八木硬介，小林靖，安藤重弥，近藤正祐，五十嵐寿夫，明田川英幸，木菱仁枝，皆川文子，外山玲子，渡辺和歌子，伊藤文子，小出睦子，原泰雄，富樫雅彦，吉田道男，南部かつみ，石川麻子，村上裕美，清野浩

ほか，小，中学校の生徒，児童から多数参加いただきました。

事 務 局

平沢一夫，青柳隆，荒木英策，相田祝司（以上社会教育課）



（1）

（2）

（5）

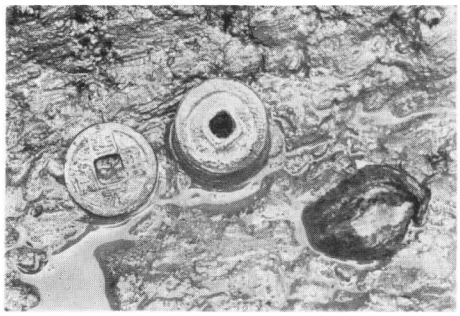
（3）

（6）

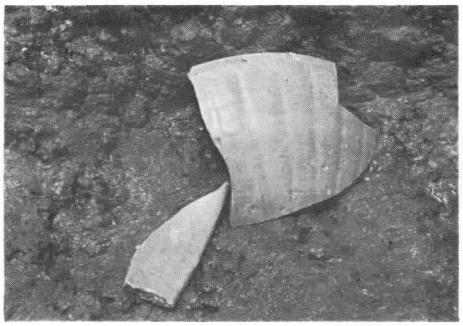
（4）

（7）

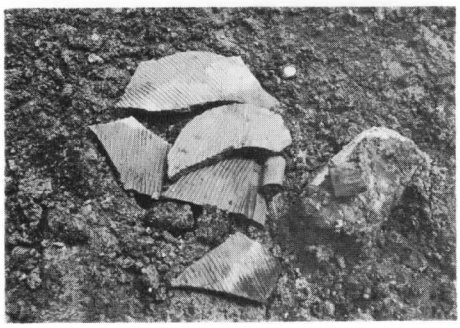
上除城址（1、2）と発掘状況、(5)は湧水



(8)



(12)

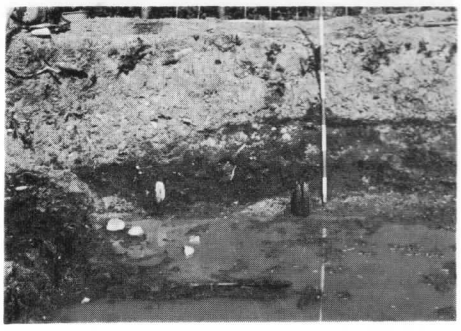


(9)

(13)

(10)

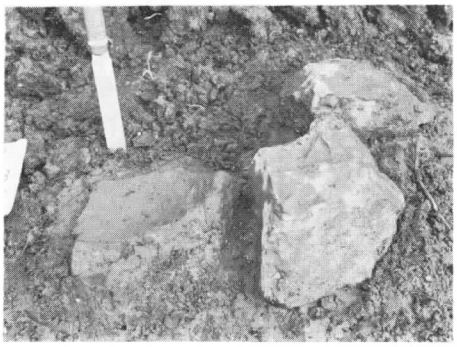
(14)



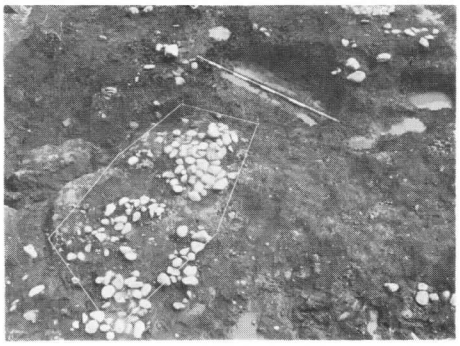
(11)

(15)

遺物と遺構の出土状況Ⅰ　⑽は藁束、⑮井戸（鍛冶場）

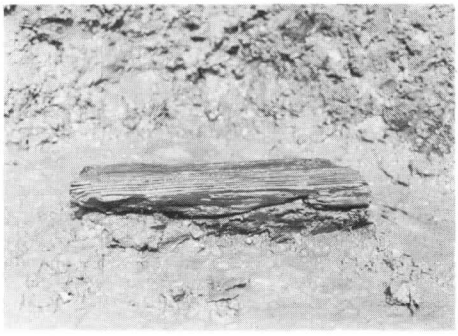


（16）



（20）

（17）

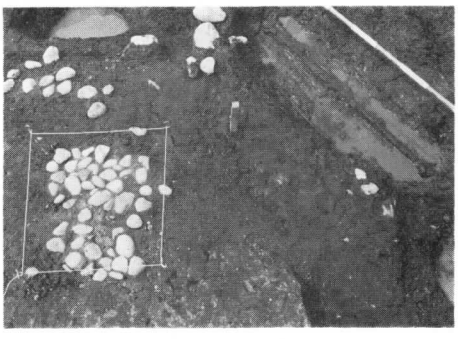


（21）

（18）

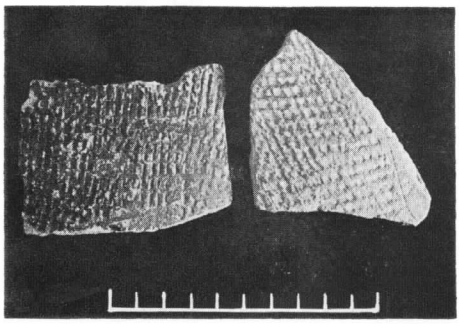
（22）

（19）

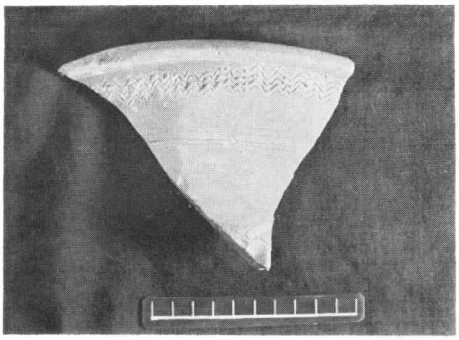


（23）

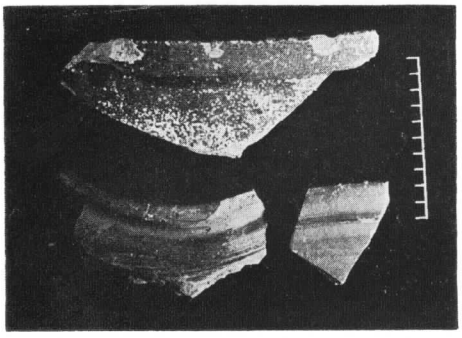
遺物と遺構の出土状況Ⅱ（東北隅鍛冶場）



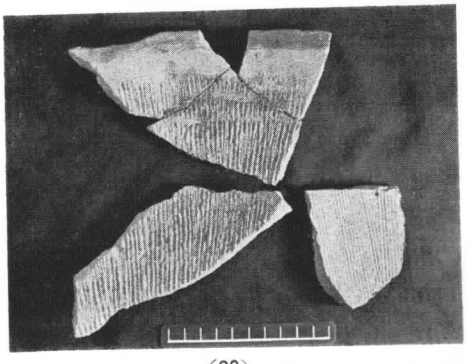
(24)



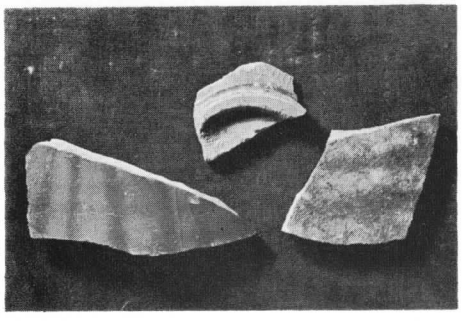
(28)



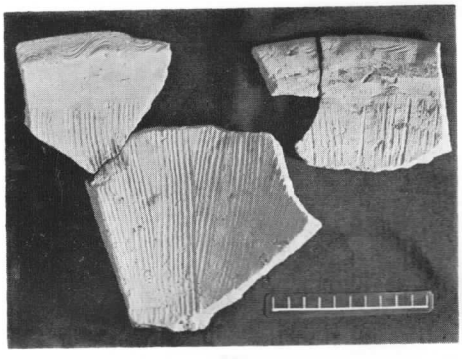
(25)



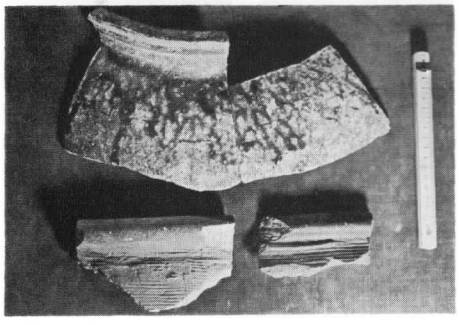
(29)



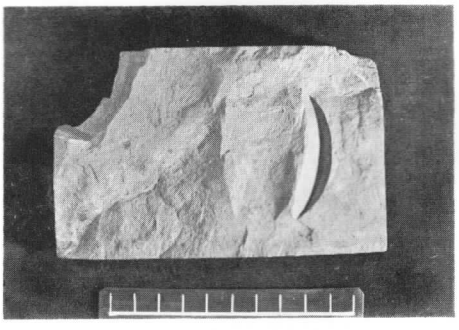
(26)



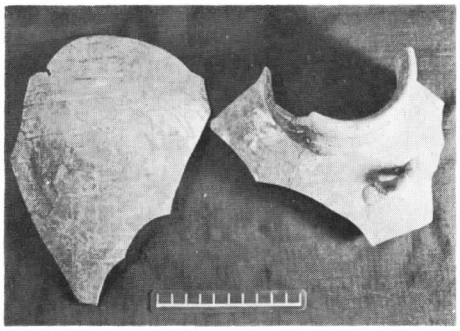
(30)



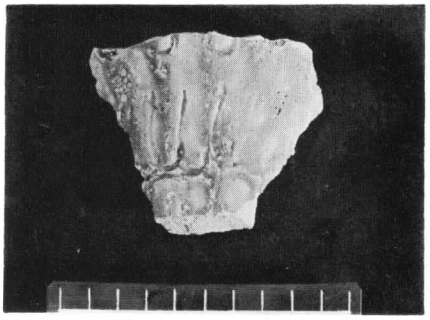
(27)



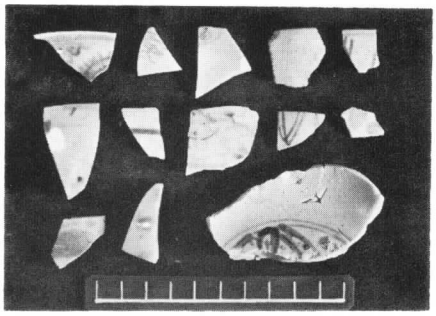
(31)



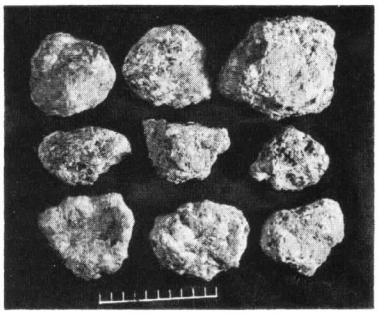
(32)



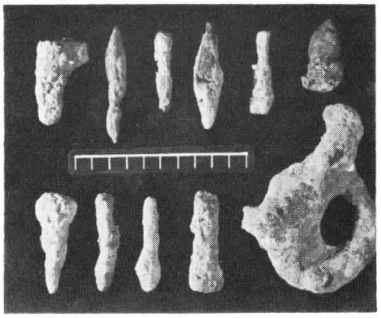
(36)



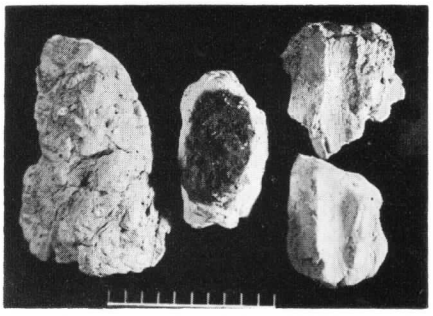
(33)



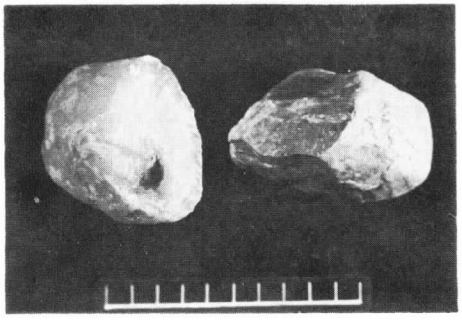
(37)



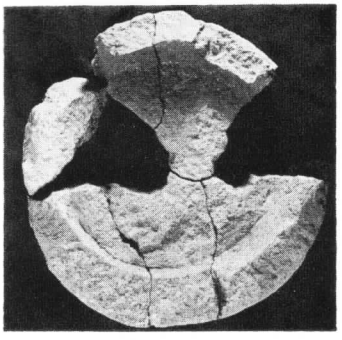
(34)



(38)

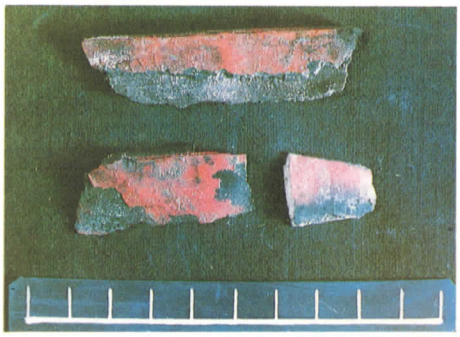


(35)



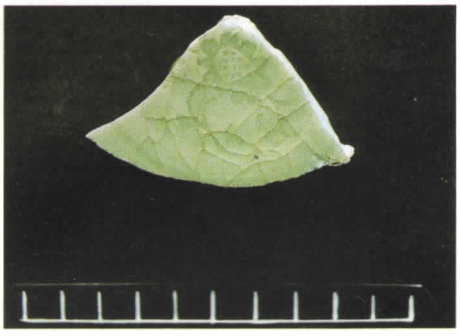
(39)

(40)



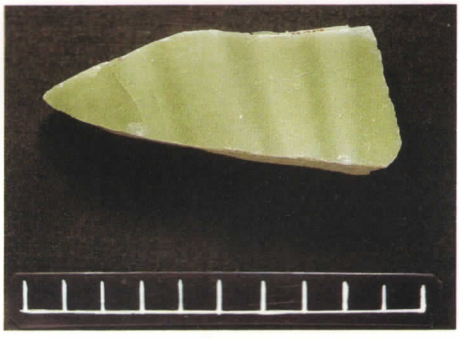
(45)

(41)



(46)

(42)



(47)

(43)

(44)

(48)

遺　　物　III

昭和51年3月22日 印刷
昭和51年3月31日 発行

上除城館址発掘調査報告書

発 行　長岡市教育委員会
編 集　上除城館址調査委員会
印 刷　北越印刷株式会社
長岡市福住1丁目6番27号
TEL　(0258) 33−0306